

# 立ち上がりつながる女性たち

## ——第1回マイノリティ女性フォーラム in 札幌

2007年10月20日から21日にかけて、札幌市アイヌ文化交流センター（サッポロピリカコタン）にて、第1回マイノリティ女性フォーラムを開催しました（主催：(社)北海道ウタリ協会札幌支部、IMADR-JC）。これまで4年間にわたり、アイヌ・部落・在日朝鮮人の女性たちが、自分たちの課題解決につなげるべく、アンケート調査の企画、実施、それに基づく省庁交渉をともに行なってきましたが、調査を通じて相互の経験共有と交流の重要性を再認識し、さらに協働の基盤を強化しその裾野を広げることをめざし、今回のフォーラムを開催しました。沖縄の女性も加わり、約100名が集うにぎやかなフォーラムとなりました。

1日目の「学び」の時間は、「アイヌ民族の歴史と女性」を学び、アンケート調査を出発点として今後のとりくみを考え、参加型のグループ活動を行ない、経験共有の後、アイヌ女性による手作りアイヌ料理を堪能。夜は歌や踊りで自分たちを表現すべく文化交流を行ないました。

2日目はグループで樹を描き、これからともに取り組みたいことを「果実」として記入。10本の樹にさまざまな思いと提案が詰まった果実が実りました。午後は北海道大学構内の

アイヌ納骨堂など、フィールドワークを行ないましたが、「語り足りない」というのが参加者の感想で、このフォーラムを第2回、3回と必ず続けていこうと約しあい、新たな出発をすることができました。

以下、参加した4人の女性から寄せられた感想を紹介します。

(IMADR-JC 事務局)

■徳田 昭子 ((社)北海道ウタリ協会札幌支部)

私の「マイノリティ」との出会いは今から数年前、支部役員をしていた時でした。支部事務局の多原良子さんから、複合差別の活動があるのだけれど支部の役員だけでも参加し、一緒にやってみませんか、という話でした。長い間、差別の中にいたわれわれが声を出していいのでは、いや今こそ声を出す時なのかも？と女性役員一致で札幌支部

として立ち上げることを決めました。が、何をどうすればいいのか何もわからない状態の中、2002年にIMADR-JCの方に来ていただき、支部の女性たちの今までの長い間の差別の体験発表会のように、泣き泣き話し、これまで語ってこなかった辛い話を曝すとともに差別への怒りを感じました。泣いてすですだけのままではいけないと強く思ったのです。

アイヌの実態調査を行なうとのことで、私も帯広支部・阿寒支部を担当し、部落解放同盟、アプロとの3団体共通設問など、どれをとってもアイヌ女性がまだまだ遅れているのには驚きましたし、アイヌ女性が差別になれているのと、自分を主張することさえしてこなかった、というのが私の個人的な感想でした。実態調査をする私自身ももっと勉強を重ねて臨んでいたら等々、反省点も多く残りましたが、一歩ふみ出せたことが大きな成果だったと思います。

支部の女性たちが支部のマイノリティ女性の会議に参加することによって、難しいとか、あまりよくわからないと思っていましたが、今年3月、団体が実態調査の結果を持って政府に陳情に行こうと盛り上がり、個々にお金をためて東京に行ったことは、自分たちの自信につながったと思います。今までアイヌと呼ばれないように下を向いていた人が自己主張できるようになったり、わからないけど頑張り(笑)、こんな感じでも一歩前進した気がして、少しずつではありますが、マイノリティ女性の活動が何なのか、おぼろ気に皆に入っている気がします。

第1回フォーラムを札幌で！！と何度か話し合いを持ちましたが、個々がそれぞれ忙しく、なかなか完璧にもてなす下準備ができなかった反省はありますが、まずは一歩として記念すべきフォーラムをわれわれアイヌモシリで開催できたことは本当にうれしかったです。部落の方々、在日朝鮮人の方々、沖縄の



方々との距離をより一層みぢかに感じましたし、ともに手をつないでいこう！！とあらためて思いました。第2回・第3回の開催にむけ、つもり貯金をし、皆様に笑顔で会えるよう今から考えています。

この活動を通じ一番変わったのは自分自身だった気がします。尻ごみしながら時には疎外感を味わい、時にはめんどろになり、時にはさぼったり、でも今では札幌支部はもとより道内の支部女性、また道外のアイヌ女性とも、ともに老いも若きも、この活動ができること、すばらしい文化を持つアイヌ民族を知ってもらえることができるよう、一步一步前進していきたいと思っています。

(とくだあきこ)

#### ■巽 千津子 (部落解放同盟奈良県連合会)

このフォーラム開催までには実に長い年月がかかっている。そのことが参加者の1人ひとりの表情から読み取れる。達成感、充実感、満足感でいっぱいの顔である。

マイノリティ女性たちの「自分たちの手による自分たちの実態調査」という地道でいねいな作業を経て、それぞれが属する組織のなかでの矛盾を抱え、集結してきた熱い想いの出発点でもある。

奈良県連女性部では高齢化と非識字者が多いという実態をふまえ、本番の部落解放全国女性集会(2005年1月、鳥取)でのアンケート調査の前に、できるだけ正確な結果が出るようにとアンケートの問い1つひとつを読み上げ確認しながら答える練習をした。その結果、DV(ドメスティック・バイオレンス)の被害が結構あったのには驚いた。これまで部落差別の経験を語り合うことはあっても踏み込んで夫婦の問題にまで立ち入ることはなかった。部落の中にある男尊女卑の考えや複合差別の課題が浮き彫りになった。部落女性のDVやセクハラに関しての相談窓口の設置を急がなければならない。

会場に入ると10グループの円テーブルが配置され、なごやかなムード。各グループにそれぞれの団体が分散され、今回のフォーラムが交流中心であることがうかがえる。そしてその意図のとおり、夕食時くらいになると大いに盛りあがった。

「若い子たちが結婚差別や、就職差別から逃れるためアイヌの地から離れていく」、「アイヌ文化の継承者が少なくなっていく」、「部落

の人がなぜ学校へ行けなかったのか」、「日本の中での部落差別が理解できない」、「役員はほとんどが男性。いま私たちはこの実態調査を通じてつながり、女性たちが立ち上がり運動することを学んだ」。アイヌ料理をいただきながら、それぞれが抱える悩みを語り合い、うなずき合う。

文化交流。部落解放同盟からは「解放歌」と「母はたたかわん」を大合唱。アイヌの歌や踊りの豊かさ、華やかさの前では少しかすんで見えるけれど、私たちの闘いの歴史を刻んだ歌であり、象徴であり、誇りである。「母はたたかわん」については、「母としての生き方を選択しない、または、できない女性がいることから、異議もあります。常に論議しながらの運動です」との解説が入る。内に課題を抱えてこそその運動でもある。

また、会いたい。もっと多くのマイノリティ女性たちと交流し、つながり、大きな力とうねりをつくろう。そして、マジョリティ女性たちとの壁を乗り越え手をつなぎ、すべての女性の人権が確立される社会をつくろう。

今回は、アイヌ料理を堪能した。次回は、朝鮮料理か沖縄料理か……。ムラのさいばし、ホルモンの煮ごりもおいしいよ。あぶらかす入りの雑炊も最高!

おいしいものを一杯食べて、本音の話をいっぱいしよう。(たつみちづこ)

#### ■方 清子 (アプロ女性実態調査プロジェクト)

今回、在日女性の実態調査に携わった「アプロ」のメンバーとして、記念すべき第1回マイノリティ女性フォーラムに参加することができ、大きな収穫を得ることができました。

1つは、これまで各々の実態調査結果をペーパーで見るだけでしたが、直接お会いし、ともに過ごした2日間は貴重な体験でした。グ



ループごとのワークショップ、話し合いや文化交流で心も身体も解きほぐされました。だからこそ、たがいの体験やこれからのことなどもっと議論し、分かち合えなかったことが心残りです。元来、私たちは行事の合間や終わったあとに話が盛りあがったり、夜っぴいてあーだ、こーだとやりあったりするのが楽しみなものです。そこが泊まりがけのいいところ。今回、残念なことに宿がばらばらで、終了後ただちに各々の宿舎に戻らなければならず、本当に残念でした。ただし、これはまったくの不可抗力で、して言えば、紅葉真っ盛りの北海道にこの時期に行ったのが仇あだになったのでしょうか……。

もう一つ、私にとって大きな収穫は、アイヌの歴史、文化、そして人びとと触れ合えたことです。会場の「アイヌ文化交流センター」も素敵でした。庭にしつらえた伝統のわらぶき藁葺き家で織物をされていた女性の「私たちは自然とともに生きるために、獲物や食料は必要最小限しかとりません。この家は一本の釘も使っ

ておらず、壊れるときは大地に帰るのです」という言葉が印象に残りました。言葉と行動、生き方がそのまま一致する、そのようなアイヌの人びとの生活を垣間見て感動すら覚えました。また、日本によって侵略され、踏みにじられた歴史、中でもアイヌの女性たちが開拓者の男たちに性的に蹂躪された事実、怒りがこみ上げました。翌日訪れた北海道大学でも、かつて北海道帝国大学という名のもとにアイヌの人びとの土地を奪って大学を建設し、アジア侵略の足がかりにしたことは、まさに日本帝国主義が朝鮮半島を植民地にした歴史と重なっていることを知りました。

最後に、この日のために練習を重ねたアイヌの歌や踊りを披露してくれたこと、それに料理がまた独特で、おいしかったことが忘れられません。奪われた伝

統や歴史を取り戻そうと取り組んでいる彼女たちの姿がまぶしかったです。心のこもった最高のもてなしに、「次は大阪で」という提案に自信を持って「はい」と答えることはできませんでしたが、今後大阪の仲間と検討していきたいと思います。

(ばんちゃんじゃ)

#### ■親川 裕子 (琉球弧の先住民族会)

交流をとおして、さまざまなコメントから参加者をもっと語りたがっていることを痛感した。当然のことながら、調査を終えた彼女たちはエンパワメントしていた。自らをとりまく違和感を言語化することで見えなかったことが見えてきたことに起因するのだろう。

マイノリティ女性としての経験を語るには困難が多い。だから語らずにいられるならば語りたくなかったであろう。しかし、報告書もそうだったが、フォーラムでも自らの声を振り絞り、「これからのマイノリティ女性に同じ思いはさせられない」——そういう思いが痛いほど伝わってきた。

TVドラマや映画によって「癒し」という手垢のついたフレーズで表象される沖縄の老女「オバア」。しかし彼女たちの琴線に触れることは容易ではない。差別された過去を覚えていたら前に進めない。だから忘れない。語りたくない。そうやって沖縄戦の実相もなかなか語られてこなかった。思い出せば苦しくなるだけだからだ。苦しいことをわざわざ思い出すより、今の生活を充実させることのほうがずっと建設的だ。しかし、語られなかったできごとは、いつの日か無かったものとなってしまふ。フォーラムに参加して、自分の生まれ育った地にまだまだ足がついていない自らを嫌というほど痛感した。語らせていないのは私たち世代かもしれない、そう思えば思うほど、そういう意味ではけっして楽な会合ではなかった。参加者の女性たちが語る自分史に何度もこみあげる涙を抑えていると、頭痛さえてきた。会の最後には次回開催の強い希望が確認された。琉球・沖縄でまだまだ複合差別という言葉は払がっていないけれど、いつの日かマイノリティ女性の会合がここでも開催できたらと思った。

最後に、実態調査を行なったみなさんに敬意を表し、会を主催してくださった方々にお礼を申し上げたい。ありがとうございました。

(おやかわゆうこ)

